



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「壮大な岩が風にまったく揺るがないように、賢者は、非難と称賛に動じない」。これはブツダの言葉です。

酔狂な映画監督がいるもので、実は今、私は町医者ドキユメンタリー映画の被写体です。その中で終末期医療に対して過激なことを語っています。最期まで過剰な延命治療を施す医師や、余命わずかな人をたらい回しにする病院への怒りなどです。でも、この映画が公開されたら、また非難されるのかな。少し憂鬱になったとき、先のブツダの言葉とともに、この先輩医師の生き方を想いました。

熊本市にある慈恵病院の理事長であられた蓮田太二先生が、10月25日に同市内の病院で亡くなられたとのこと。享年84。死因は心筋梗塞とのこと。

179 医師 蓮田太二



近年は糖尿病を患っており、3年ほど前には糖尿病から敗血症を併発し片足を切断。車椅子で生活されていたとのこと。ですから、死因となった心筋梗塞は、突然死というよりも、糖尿病の合併症と言ったほうがいいでしょう。糖尿病の人が心筋梗塞を起すリスクは、健康人の3倍以上にもなります。

さて、蓮田先生のお名前を聞いてもピンと来ない人のほうが多いかもしれませんね。しかし、「赤ちゃんポスト」を日本で設立した人と言えば、多くの人はハッとすることでしょう。今、わが国で年間どれくらいの子供が虐待で殺されているか知っていますか？ 2017年の調査では65人です。1週間に1人以上の罪なき子が虐待で殺されている現実。その向こうには、なんとか虐待を生き延びた何千、何万のサバイバーがいます。

そんな子供を一人でも減らしたいと、蓮田医師は親が育てられない子を匿名で預かる赤ちゃんポスト「こののりのゆりかご」を始めました。しかし、メディアは、「安易な子捨てを助長する」と直後から非難を始めます。赤ちゃんポストができても虐待死は減らないじゃないか！ とこれ見よがしに反論する医療関係者も後を絶ちませんでした。

「赤ちゃんポスト」を設立

賛否両論あるのは当然。多くの議論が必要な問題です。しかし、この国で法整備を待てたら、目の前の助かる命さえ助からない。どんな攻撃を受けても、蓮田医師は信念を変えず、「何と批判されようが、生まれてきた命は守る」と言い続けました。

まさに、「賢者は、非難と称賛に動じない」という言葉そのものです。2007年から始めた「こののりのゆりかご」に昨年度までに預けられた赤ちゃんは、155人。この子たちの未来を、蓮田医師は空から見守ってくれていることでしょう。

子供たちの未来を見守ってください